

「粘土で遊ぶ」の指導について

関 克 彦

手塚先生からご発表ねがった「粘土で遊ぶ」には、幼稚園の年長児が粘土と共に遊んだ数々の事例が楽しく語られ、新しい時代の造形指導という面から教えられるところが多かった。

このうち指導の柱になった若干の問題について補足的に感想をのべてみたい。

1 どろんこ遊び

幼児の喜んでする遊びのなかに、水遊びとどろんこ遊びがある。とくに土粘土を使うどろんこ遊びは、素材が自分の思いのままになってくれるので、子どもにとってはこのうえもない遊び相手である。手塚先生の指導は、このどろんこ遊びの趣旨を生かし、土粘土を自分でとりにゆくところから始められた。

粘土とりといっても、始めから柔かいしっとりした感触のある粘土がとれるわけではない。硬かったり、ひび割れていたり、時によれば夾雑物があったりする。こんな荒い粘土をどろんこ遊びでたたいたり、水を注いでこねたりしているうちに、次第にやわらかい粘土ができてくる。こうしてどろんこ遊びで、まず粘土取りをし、やわらかい土づくりから始めるところにだいじな意味があると思う。

どろんこ遊びでは、手も着物も汚れるということがつきまとうが、これがかえって幼児を解放感にひたらせる。まっしろいものや、新しいものを着たときは、汚してはならないという緊張感が伴うため自由にふるまえないが、どろんこ遊びのときは始めから汚れることが承知のうえで、着物も着かえて作業にかかるので、土をいじるという手の感触と共に、子どもを自然の子として呼び戻してくれる。

近頃は、農村まで都市化の傾向が見られ、子どもの生活もだんだん土の生活を離れてきている。このことを考えると、どろんこ遊びは重視されなければならないと思う。

2 粘土による造形あそび

昭和55年度から施行の文部省小学校学習指導要項には、1年生・2年生に「自然物や人工の材料を使つての造形的な遊び」という内容が取り入れられている。これは幼児期の造形活動との連携を考えて、新たに設けられたものであるから、幼稚園の先生も保育園の保母さんもこのことを承知しておられるのがよいと思う。

ところで従来は小学校の低学年はもとより、幼稚園や保育園の幼児に対してすら、粘土という材料を使って、最初から「作品づくり」を教えていたのが実情であったが、これからは粘土という材料で物をつくることを指導する前に、粘土で遊ぶ生活にひたらせることが重視されるようになったわけで、手塚先生の発表はこういう意味から言っても参考になると思う。

5歳児になって間もなく「おだんごころがし」をして楽しんだり、「高いものづくり」でくらべっこをしたり、「指人形」で劇遊びをしたり、暑い日に水着になって庭で山や川を作つて遊んだり、いろいろ遊びのしかたをかえて楽しく遊ばせているが、子どもたちはその遊びのなかからだ全体を使って素材の特質である可塑性や粘着性を認識することができた。

こうしていろいろな遊びは、材料認識のうえで大いに役立ったわけであるが、なお、粘土で作つたウサギを生きたウサギのように裏山にはなしたり、クローバを食べさせると草原に置いてやったりした。こんな遊びのなかに、子どもたちの愛情が自然に育てられていくことが思われてほほえましい。

3 粘土の可塑性

土粘土は、可塑性に富むので製作材料として高い価値を有する。すなわち、加える水の量によって柔かにしたり、固くしたりできるし、それによって自分の望むかたちを作ることができる。

可塑性という点では、他のいかなる材料にも劣らない土粘土であるが、いったんある形に作ってから放置すれば、かたまって容易にくずれない堅固な造形品となる。しかし、このかわいた土粘土の作り物は碎けば粉末となり、それに水を注いで練れば、再び粘着性のある粘土にかえる。この粘着性と可塑性は、土粘土のすぐれた特質であるといわなければならない。

それに、子どもの土粘土を好むのは手に触れた感じがしっとりとしてやわらかな感触をあたえてくれる点である。この感触があるからこそ、粘土を自然に手でおしつぶしたくなったり、たたいて平らにしたり、のばして紐状にしたり、その他いろいろの形を作ってみたくなるのである。

4 粘土いじりと形見つけ

子どもに自由な粘土いじりをさせるには、耳たぶをおさえた程度の柔らかさがよいと言われる。粘土いじりでは、始めから何かきまったものを作らせる目的でなく、まず素材に親しませるのをねらいとする。

4人グループのまん中に、なるべくたくさんの粘土をかたまりで山のようにして与え、手でほじくったり、かためて積み上げたり、穴をあけてトンネル作りをしたり、いろいろに遊ばせる。

子どもはこうした遊びのなかから、次第におもしろい形をつくり出すことを発見する。これを＜形見つけ＞とっているが、粘土いじりをしていろいろに遊んでいるなかから、おのずと生れ出てくるおもしろい形によって創造性も養われるわけである。

粘土いじりや、粘土で物を作るときは、汚れてもよい服装と場所で、粘土板は小さいものより大きめのものの方がよい。バケツに水を入れ、中に雑布を入れておくと土のついた手を洗うのに便利である。ここで粘土をよく落とし、水道で洗うと排水管がつまるような心配はない。

5 土粘土による彫塑表現

可塑性に富む土粘土は、彫塑表現に適する材料である。彫塑とは、三次元の空間

性、立体表現によるものである。言いかえれば、幅と奥行と高さをもつ造形といえる。

立体表現という場合、心象表現を主にしたものと機能性を主にしたものの二つがあるが、彫塑表現といえば前者に該当する。

ところで、幼児は手近かに粘土があると、心の中のイメージをもとに、どんなものでも作ってみようとする。たとえば、飛行機だとか、火の見やぐらだとか、電柱のようなものまで作ろうとする。しかしこれらは粘土という材料で作るにはなじまないものであるから、思うようにうまくできなかったり、できてもすぐこわれたりしやすい。

そこでいろいろ試みるうち、どのようなものが彫塑表現に適するか幼児自身に気付かせなければならないが、要は人とか動物とかのようなあるかたまりをもつものがふさわしいことに気付かせる。

こうして、彫塑表現にふさわしいものに気付いても、幼児の作り方には問題があって、たとえば、人を作るのに絵のように平たい形を作って粘土板の上に平らにのせたり、動物のようなものを作るとき頭・胴・手・足と部分的に作ってこれを接合したりする。平面的な作り方に比べれば、立体的に作ろうとしているだけ後者の作りの方が彫塑的であるが、乾燥するとバラバラに分解しやすいのが問題である。

そこでこれらの点を防ごうとして、他の作り方を指導しようとしても幼児にはむずかしいので、やはり幼児に無理なくできる方法で作らせ、しっかり接合する方法を教える程度に止どめておいて、より望ましい作り方がわかる時まで待つ以外にはないであろう。

第4図 野 焼 き

6 工芸的表現と

野焼きあそび

粘土で作るものには、上にのべた彫塑的表現に対し、用途や目的をもつものを作



る工芸的表現というものがある。

ところで、作ったものが使用できるためには、より堅固な造形物にしなければならないので、そこに焼成ということが考えられる。焼成によって硬化したものは、器物なら水を貯えることができるし、首飾りなどの小物なら着色して実用も可能となる。

幼児の場合にはこの焼成は野焼きあそびとして、園庭の隅などに適当な穴を掘って焼場を作って行なうとよい。子ども達の焼成に適するものとしては、ブローチや首飾りなどの小さいものや、小皿や妻揚げさし程度のものが適する。ブローチのような小物は針金などに通して焼かなければならないので、始めから穴をあけて作っておく。

焼く手順としては、はじめ藁や落葉などを燃してわら灰を作り、そのほとぼりがさめた頃焼くものを灰の中へ入れて、その上にこんどは薪などを積んで燃やす。その場合も、はじめ藁などを燃したあと、しばらく弱火で薪を燃やし、次第に強火にする。約2時間ほど燃し続けたあと、ほとぼりがさめるまで放置する。

子どもは野焼きあそびをたいへん喜ぶ。ちなみに、ことし手塚先生のクラスで野焼きをされたのが11月27日だったという。

(上田女子短期大学教授)